

原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社禰宜



第二十回 エメエ・アンベール 『絵で見る幕末日本』(下)

「彼らは、瞬間的な印象のもとに生活し、人生の苦楽や困窮に会っても、なんらの不平を持たず、死ですらも宿命的な性格が与えられて、平凡な日常の些事として見られようとしているのである」

アンベールが絶賛した日本は、風景だけに留まりません。それは日本人の性格や生活文化、殊に幕府や大名などの支配階層ではなく、一般民衆の勤勉さや道徳観、生活の中にある創意工夫などを高く評価し、深い好感を寄せて記録しています。今回は、彼の見た民衆の様子にスポットを当ててみましょう。

先ず、民衆の性格について、こんなことを書いています。

「通訳にしろ、水先案内にしろ、自分の世界において、何か永久的なものがあり得るだろうか？ 今日の日は、虚無の深淵の中に消滅していき、そのはかなさは、夢のようである。それは、微細な不安すら残さなかった」

「この東半球の端において、われわれと全く同じ不死の創造物である人類の幾百万という少年たちが、毎日繰り返しいる詩に私は興味を感じた。そして、そこには、次のような意味があることを知り、驚かされた。

『色も香いも、消えて行く。われわれの世界において、何か永久的なものがあり得るだろうか？ 今日の日は、虚無の深淵の中に消滅していき、そのはかなさは、夢のようである。それは、微細な不安すら残さなかった』

正直なところをいうと、この民族的なアルファベットは、最も浩瀚な書物よりも、より多くの日本人の基礎的性格に関する真実を私に語った。長い世紀にわたって、舞台から去って行く世代が、新しく登場する世代に対し、『この世界には、永久的なものは何もなく、現実が夢のように過ぎて行き、そして、その消滅は何の不安も残さなかった』ということを繰り返し返して教えているのである。現世に対するこのような哲学は、現世が人間性の要求を満足させるものではないことを教え、こうした宗教観の表現がこの国に与えた恐るべき結果が、これを実証している。そして、この哲学観は、潜在力として不断の活動を続け、その影響が生活の瑣事の中に無数にあらわれていることは、想像に難くない」

義務の遂行には極めて真面目であり、西欧の newcomers のむさぼるような知識欲を充たすため驚くべき才能をもって奉仕した」

「沿岸地帯に住んでいる善良な人たちは、私に親愛をこめた挨拶を交わし、子供たちは、私に真珠の貝を持って来るし、女たちは、籠の中にたくさん放り込んでいる奇妙な形をした小さな怪物をどのように料理すればよいかを、できるだけよく説明しようと一生懸命になっている。親切で、愛想のよいことは、日本の下層

また、こうした教育・思想は日常の生活にいっきと表現され、人々の性格を形づくっていることも紹介しています。

「日本人の住居は、現在の瞬間に適應されているが、しかし、過ぎ去った瞬間の痕跡をとどめない。すべてが、外部の世界の現象との即座の妥協に終始している。したがって、夜となるやいなや、戸障子が閉められてしまつて寝室に変化し、油紙を張った木製の籠の中で、灯油に火がともされ、その明かりが、天体の静かな光のように、暗闇の中に閃くかと思うと、朝になると、その反対に、寝室にあるすべての物が取り払われて、一定の場所にしまわれてしまい、四方の戸障子が開け放たれ、室の隅から隅まで掃き出され、朝の空気が流れ込み、太陽の光線が野外と同じく、広い幅をなして、畳の上で落ちるのである。最後に、昼下りの猛暑の時には、密閉されたようにふさがれてしまい、すべての空間や隙間が衝立や幕で閉ざされ、地下の洞窟にでも入ったように、暗くなつてしまつたのであった。このような生活様式は、人生を感覚的な現象の側からのみ見ている結果である。このため、彼らは、瞬間的な印象のもとに生活し、人生の苦楽や困窮に会つても、なんらの不平を持たず、死ですらも宿命的な性格が与えられて、平凡な日常の些事として見られようとしているのである」

階級全体の特性である。私は、よく長崎や横浜の郊外を歩き回って、農村の人々に招かれ、その庭先に立ち寄って、庭に咲いている花を見せてもらったことがあった。そして、私がその花を気に入ったと見ると、彼らは、一番美しいところを切り取って束にし、私に勧めるのである。私とその代わりに金を出そうといくら努力しても、無駄であった。彼らは金を受け取らなかつたばかりか、私を家族のいる部屋に連れ込んで、お茶や米で作った饅頭(餅)ご馳走しないかぎり、私を放免しようとはしなかつた」

女性たちが捕まえた小さな怪物とは、ナマコなのかシヤコなのか、正体も気になりませんが、民衆が老若男女・職業を問わず、相手に対して優しく接し、おもてなしが自分の喜びであるかのように行動することに、彼は感動しています。

また、民衆の生活文化についても興味深い記述があります。

寺子屋の子供たちが毎日繰り返している「いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ つねならむ うゐのおくやまけふこえて あさきゆめみし ゑひもせす」を、アンベールは「日本のアルファベット」と呼んでいます。その意味が深遠なものであることに驚いています。

世界を旅しながら来日したアンベールは、短期間で深く日本人を研究しました。最後に、他国の人々と比較して、日本人をとんでも高く評価した部分を紹介しましょう。

「日本人の間に認められる表情の活発さと相貌の多様性は、私の意見では、あらゆる他のアジア民族よりも、より自主的であり、より独創的であり、より自由である知育発育の結果である」

「彼らは、統制によって打撃を受けながらも、支那の、全社会階級の特徴である衰亡と病弱の兆候を少しも示していない。

支那は、使い古して、腐りかかった建物を思い出させるが、日本では、荒廃もなければ、老衰もなく、常緑の島の新鮮な植物のように、永遠の若さの兆候があり、それを、この幸福な国の住民たちは、世代から世代に伝えていっている。彼らは、その永遠の春の表徴をもって、最後の住所をすら飾っており、このため彼らの墓地は、一年中、いかなる時にも草花に埋まっている」

「各家庭は、それぞれ自分の墓地を持っており、死んだ人は、それぞれ共同休息所に自分の墓石を持っていて、死んだ人の思い出話が、あの丘でも、この丘でも、大規模に展開されるのである」と。